米子城フォーラム関連イベント
山陰歴史館連携事業

〈米子城魅せる！プロジェクト2016〉

米子城を極める！（現地ウォーク）
資　料

「米子御城明細図」[元文4(1739)年]（鳥取県立博物館蔵）

平成28年（2016）　10月2日（日）

主　催：米子市・米子市教育委員会

共　催：一般財団法人米子市文化財団

米子城跡 -海を臨む天空の城-

伯耆米子城絵図【文久3（1863）年8月】

米子市の中心地、湊山に築かれた米子城は山頂に五重の天守閣と四重の副天守閣（四重櫓）の大小二つの天守を持つ壮麗な城で、「山陰髄一の名城」と呼ばれていました。今は、建物は失われていますが、石垣などは残り、往時の姿をよくとどめています。

平成１８年（2006）に本丸、二の丸などが国史跡に指定されました。

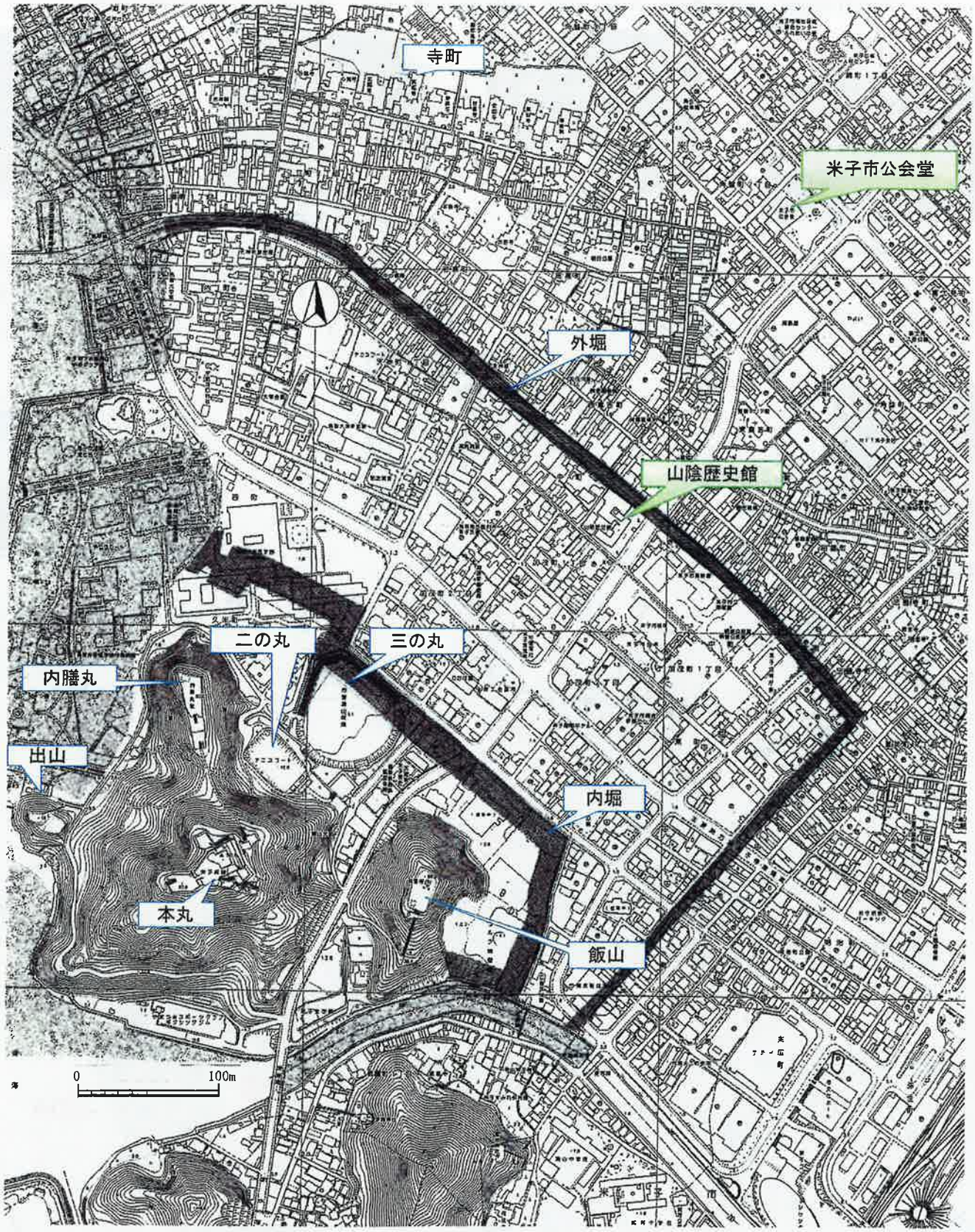
米子城の歴史

米子城は、室町時代、応仁の乱の頃の応仁～文明年間（１４６７年～１４８７年）に山名宗之により砦として築かれたことに始まります。石垣を備えた本格的な城は、戦国時代末期の天正１９年（1591）ごろに西伯耆の領主となった吉川広家により、湊山に築城が開始されたといわれています。しかし、慶長５年（1600）の関ヶ原の戦後、吉川広家は岩国に転封となり、代わって伯耆１８万石の領主として駿河から入った中村一忠により慶長７年（1602）頃に完成したといわれています。その後、城主は加藤貞泰、池田由之とかわり、寛永９年(1632)からは、鳥取藩主主席家老の荒尾成利が米子城預かりとなり、明治２年（1869）に藩庁へ引き渡されるまで代々荒尾氏が管理しました。

米子城の構造

米子城は、湊山頂上の天守(本丸)を中心に、北の内膳丸、東の飯山を出丸として、湊山ふもとに二の丸，三の丸を配し、城郭中枢部は中海から水を引き込んだ内堀を廻らせて防御していました。

米子城下町は内堀と外堀の間に武家屋敷を、外堀の外側に町人区を配していました。このため、中海に通じる堀の水運を利用した商売がさかんとなり、城下町は伯耆の文化的、経済的中心として繁栄し、今に繋がる「商都米子」を形成していきました。



米子市街地図

米子城跡　見所マップ

本丸から望む、市街地や、大山、中海、日本海の眺望（ちょうぼう）は、今も多くの人々に親しまれています。

① 枡形虎口
二の丸の入口、城兵の集合場所でした。

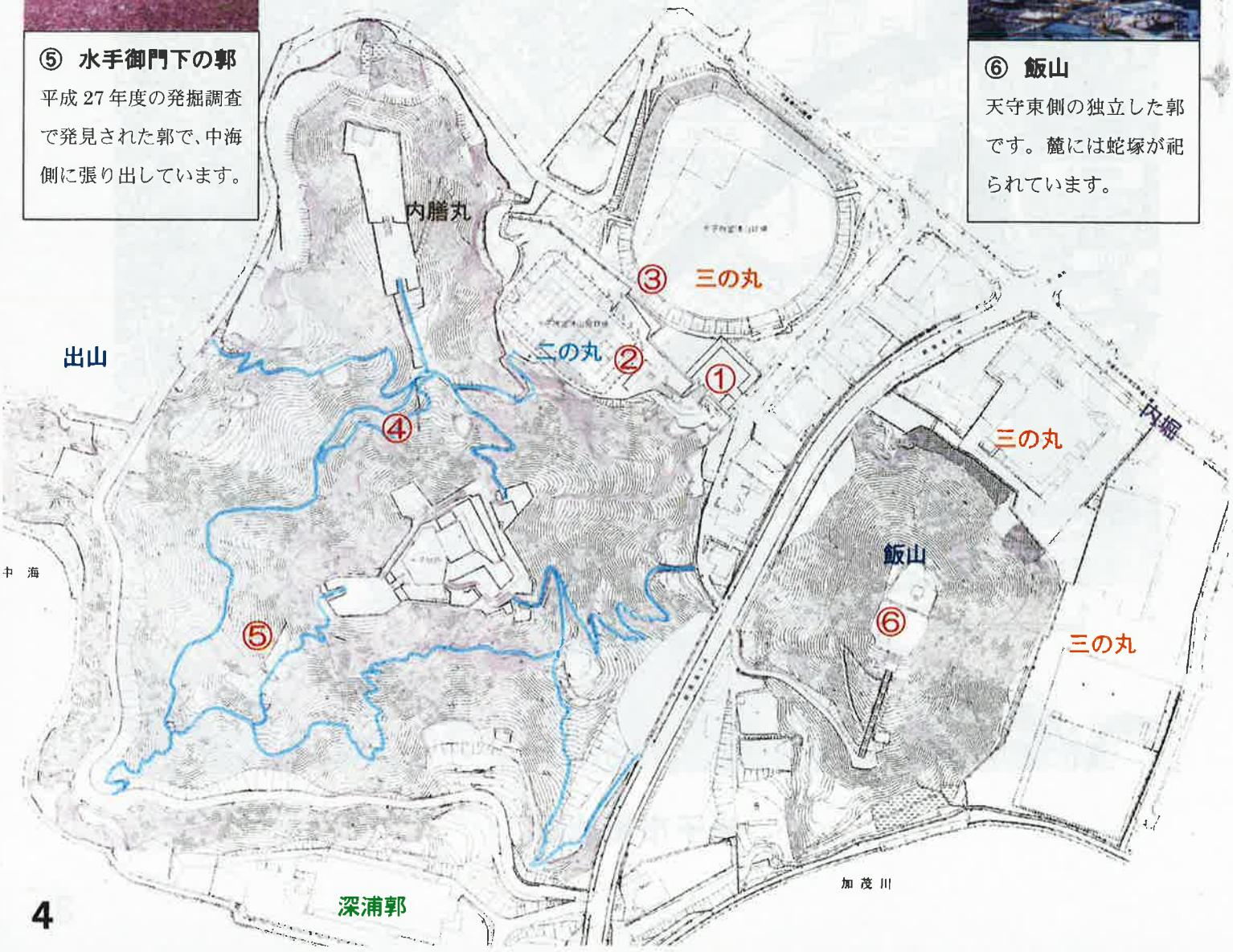
② 小原家長屋門
城下にあった荒尾家臣小原家の屋敷門を移築したものです。

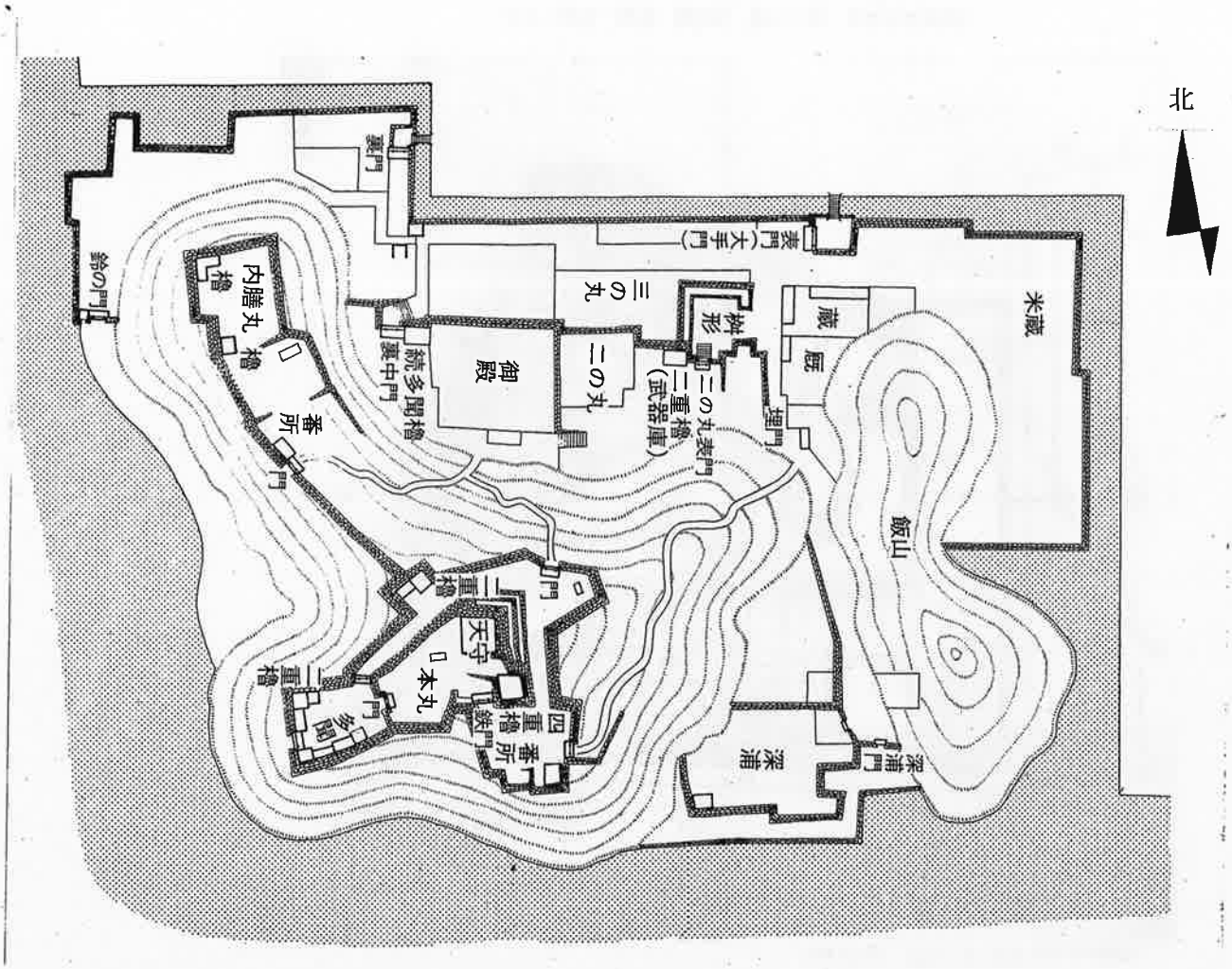
③ 二の丸高石垣
二の丸の石垣。横矢掛など防御の工夫が見られます。

④ 登り石垣
内膳丸から天守遠見櫓にかけて尾根を登るように築かれています。

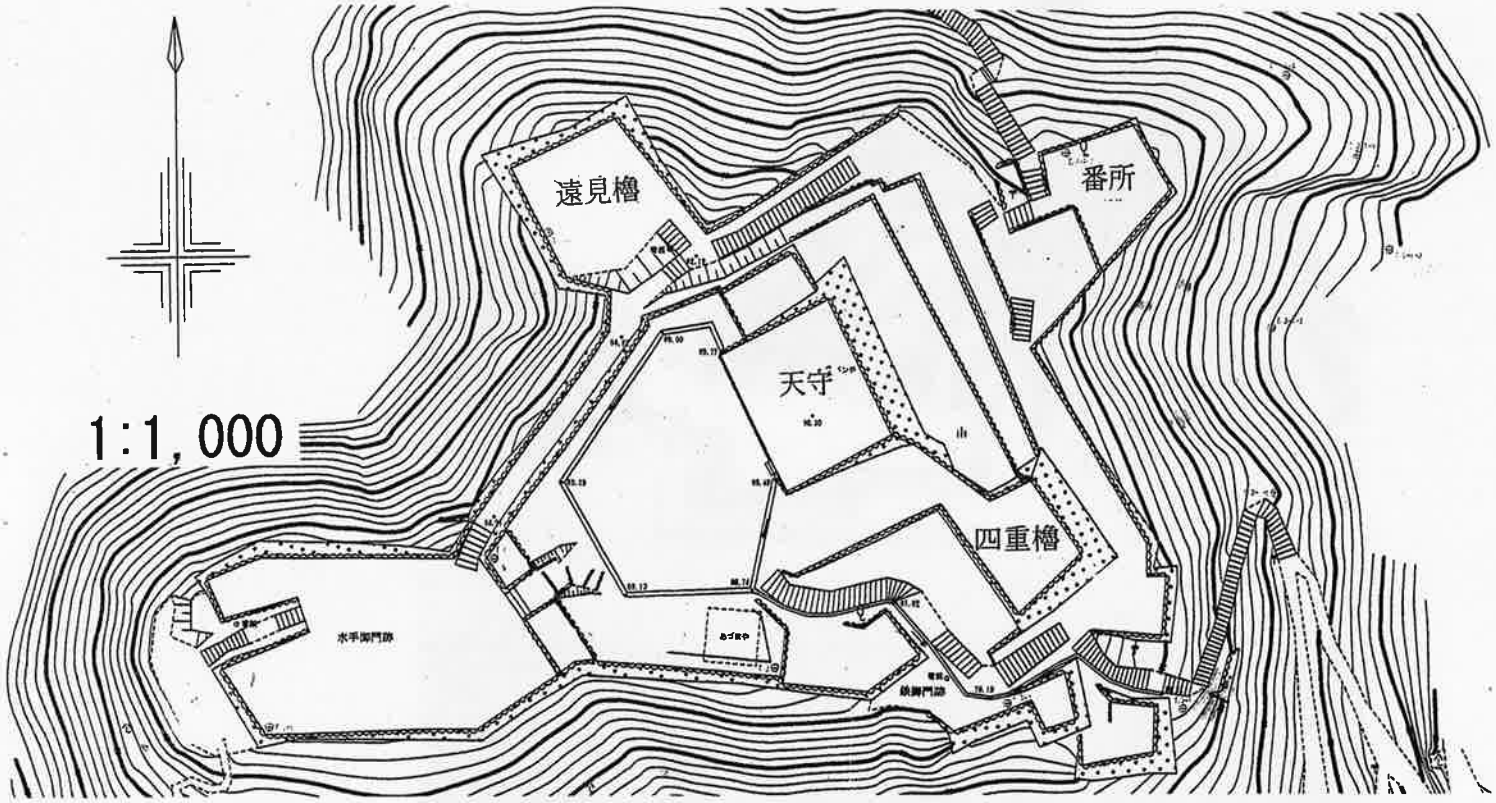
⑤ 水手御門下の郭
平成27年度の発掘調査で発見された郭で、中海側に張り出しています。

⑥ 飯山
天守東側の独立した郭です。麓には蛇塚が祀られています。



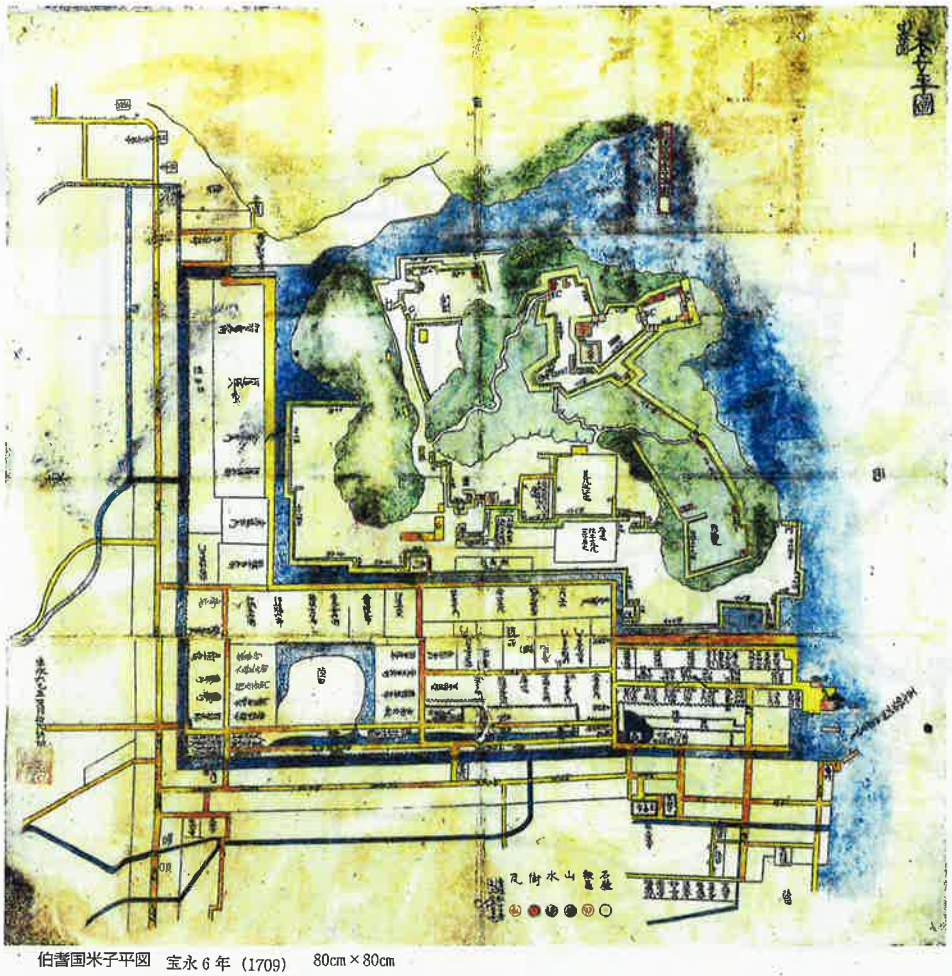


米子城縄張図

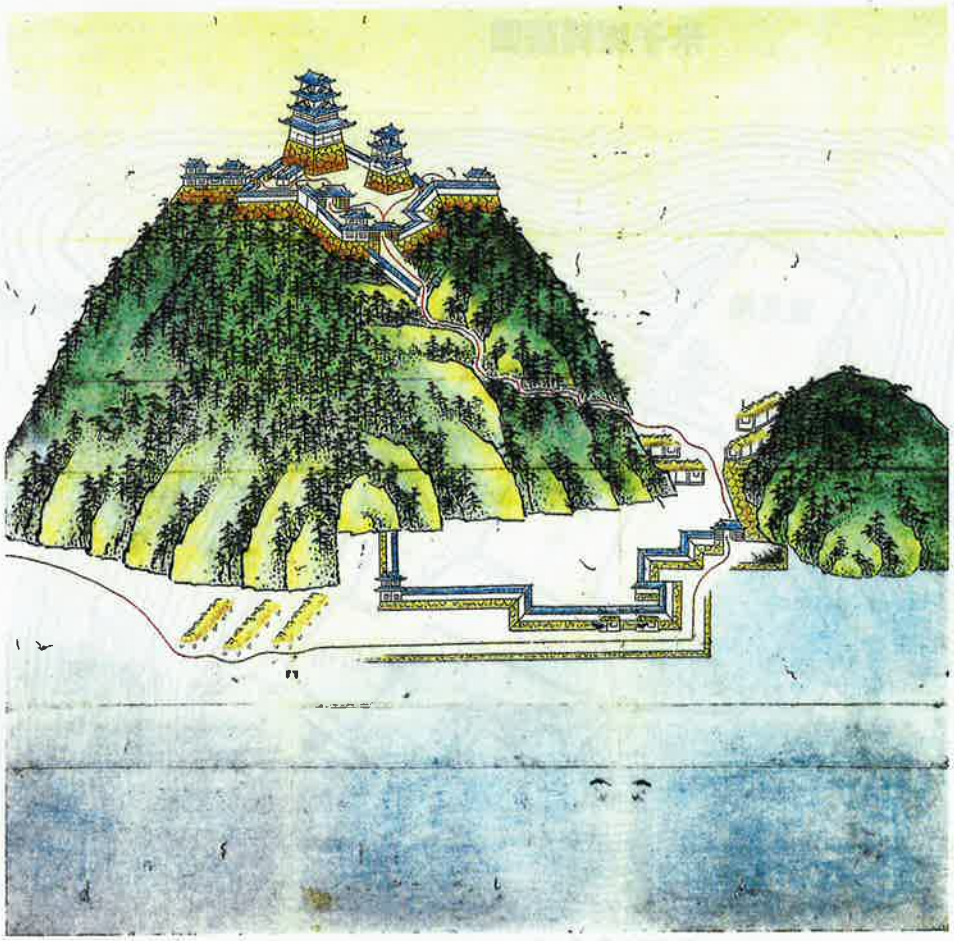


米子城本丸

『新修米子市史　第１２巻　資料編　絵図・地図』より



伯耆国米子平図　宝永６年（1709）　80cm×80cm



米子城襄絵図　年代不明　90cm×93cm

米子城を深浦側から描いた珍しい絵図である。幕府へ提出された修復願図は、北側から俯瞰して描かれているため、深浦側は死角となり、城の諸施設は記されない。この絵図は、成立年代は不明であるが、深浦側から描いた唯一の米子城絵図であり、貴重である。

米子城関連年表

米子は１４６７年応仁の乱の時に砦が築かれる以前に漁師町あるいは港町として成立していました。

応仁１年（1467）～　応仁の乱　米子飯山に山名宗幸が砦を築く。
大永４年（1524）　５月　尼子経久伯耆に侵入　米子城、淀江、尾高などの城を攻め落とす。
永禄５年（1562）　毛利元就の富田城攻め、因幡、伯耆へも進出。
永禄９年（1566）　富田城陥落。山陰地域は毛利支配下に入る。
元亀２年（1571）　尼子氏再興運動、尼子勝久・山中幸盛因幡・伯耆へ侵攻。
天正６年（1578）　尼子勝久上月城で自刃　尼子氏滅ぶ。　この頃の米子城番は古曳吉種。
天正９年（1581）　鳥取城落城、秀吉が伯耆一円を支配。
天正13年（1585）　秀吉と毛利輝元の和睦　八橋以西の伯耆三郡が毛利領となる。
天正15年（1587）　吉川広家（吉川元春の三男）、吉川家の家督を継承。
天正19年（1591）　吉川広家が秀吉から西伯耆、出雲、備後など12万石を認知され、富田城に入るが、居城を米子に変え、山県九左衛門を奉行として築城開始。
文禄１～慶長３年（1592～1598）　文禄慶長の役（朝鮮出兵）　吉川広家従軍、古曳吉種は朝鮮で討ち死（1592）。慶長３年８月、秀吉死す。
吉川広家、富田城に帰り、湊山築城を監督、米子港、深浦港整備。
慶長５年（1600）　関ヶ原合戦　吉川広家西軍として出陣。
吉川広家、周防国岩国（３万石）に転封、この頃城は７割方完成。
駿河国府中城主、中村一忠（18万石）が伯耆国領主となり尾高城に入る。
慶長７年（1602）　中村一忠、尾高城から完成した米子城に移る。
慶長８年（1603）　中村一忠、家老の横田内膳を暗殺（米子城騒動）。
慶長14年（1609）　中村一忠20歳にて死、中村家は断絶。
慶長15年（1610）　岐阜美濃国黒野城主加藤貞泰、伯耆国会見・汗入郡６万石領主となり入国する。
元和１年（1615）　大坂夏の陣、豊臣氏滅ぶ。幕府は一国一城令を発布するも、米子城は保存と決まる。
元和３年（1617）　加藤貞泰、伊予国大洲に転封、
因伯領主となった池田光政の一族、池田由之が米子城預かり（３万２千石）となる。
元和４年（1618）　池田由之死亡、子由成が米子城主となる。
寛永９年（1632）　池田光仲、因伯支配（32万石）、家老荒尾成利が米子城預かりとなる。
嘉永５年（1852）　四重櫓と石垣を鹿島家の負担により大修理。
慶応４年（1868）　明治維新。
明治２年（1869）　朝廷より米子城返上の命令あり。
明治５年（1872）　米子城山は士族小倉直人らに払い下げとなる。
明治６年（1873）　城内の建物類は売却され、数年後取りこぼされる。

かるちゃんのちょこっとお城の用語解説

海城（うみじろ）

城の周囲が海・湖などに面している水域の中で、特に海に面しているもの。

大手門（おおてもん）

城の表口に建つ門。通常は二の丸や三の丸の正門。

搦手門（からめてもん）

城の裏口に建つ門。

郭(くるわ)（曲輪）

城の内外を土塁、石垣、堀などで区画した区域の名称。本丸、二の丸、三の丸など主要な廓内には、城主の居所のほか、兵糧を備蓄する蔵、兵たちの詰所などのほか、郭の出入り口である虎口を閉める門や、塀、物見や攻撃を与える櫓（やぐら）が建てられた。

鉄門（くろがねもん）

門扉や柱に細長い鉄板をすき間なく貼った門。少し間隔をあけて、筋状に鉄板を貼った鉄筋門もあり、これを鉄門と称した城もある。

虎口（こぐち）

城の出入り口、小さな入口に作り敵の侵入を防いだことから、はじめは「小口」と書いたが、後に「虎口」と書かれるようになった。

御殿（ごてん）

政庁の場所でもあり、城主とその家族の住まいでもある建物。公的な空間である「表御殿」と、私的な空間である「奥御殿」がある。

侍町（さむらいまち）

城下町において、城主の家臣（侍）の住居から構成されたまち、侍屋敷地とも言う。

総構(そうかまえ)（総曲輪）

城下町を長大な堀や土塁・石垣で取り囲み、大規模な郭としたもの。近世期には政治の拠点である本丸、二の丸、三の丸など城の主要な部分（内郭）から、さらにもう一重外側に防御線を設けられるようになった。これが総構である。総構の堀は総堀（惣堀）と言うが、外堀と言われることが多い。

本丸、二の丸、三の丸（ほんまる、にのまる、さんのまる）

近世では城の中心となる郭は本丸と呼ばれ、本丸に天守が設けられることが多かった。二の丸、三の丸といった呼称は、本丸からの位置関係によるもの。

竪堀（たてぼり）

敵の横方向の移動を防ぐため山の斜面と平行に縦（竪）に掘られた空堀のこと。

町人地（ちょうにんち）

城下町において、商工業者（町人）たちの住居・店からなる町。町屋敷地とも言う。

伯耆国米子城絵図
（文久 3［1863］年 9 月）

寺町（てらまち）

城下町において、寺院を集中的に配置した地域。防御の役目も果たす。

天守（てんしゅ）

城の中心に建てられた高層の櫓。「天守閣」は俗称。

出丸（でまる）

城の守備が脆弱な箇所の補強や物見などの目的で作られた補佐的用途を持つ曲輪。

土塁（どるい）、石垣（いしがき）

敵の攻撃、侵入を防ぐために、城の外周や郭の周囲に土を持って固めた施設のこと。

近世城郭では土塁に代わり、土塁壁面に石を積み上げた石垣が主流となる。

縄張(なわばり)

城の曲輪や堀、門、虎口等の配置をいう。城郭での戦いの勝敗を決める要素の一つに、城郭の形状・構造が挙げられる。そのため築城に際してなるべく防御側に有利になるよう、城郭の立地なども考慮して縄張が決められ曲輪が配置された。縄張の基本は城郭の核となる本丸の周囲に、二の丸、三の丸を効果的に配置することにある。

枡形（ますがた）

四角形の小さな広場のこと。

枡形虎口（ますがたこぐち）

枡形と2つの城門を組み合わせた二重構造の出入り口のこと。敵の直進を防ぐために直角に折れ曲がっている。敷地から飛び出すように築かれたものを**外枡形**、敷地内に取り込まれたものを**内枡形**という。

町割（まちわり）

城下町において城下全体を軍事的、政治的、経済的中心とするために城を中心として、侍町、町人地、寺町を計画的に配置した構造のこと。

堀（ほり）

敵の進撃をはばむための人工的な大溝で、水のない堀を「空堀」、水のあるものを「水堀」と呼ぶ。

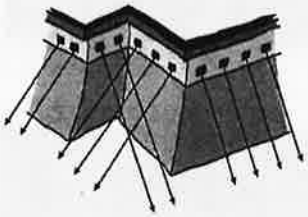
櫓（やぐら）

主に郭の隅などに築かれた建物で、監視や攻撃の拠点としての役目を持つ。近世城郭では単層の平櫓、二重以上の櫓、長屋のような多門（多聞）櫓など多様化し、天守の代用となる櫓もあった。

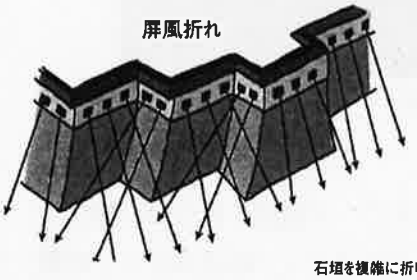
横矢（よこや）

正面と側面など二方向からの攻撃のこと。横矢を構えることを横矢掛（よこやがかり）と呼び、石垣を直線的ではなく途中で折れ曲げ、横矢がかけられるようにすることが城の防御の最大の基本とされた。

石垣が直線のままだと、石垣の下にいる敵に対して上から下への1方向しか攻撃できず、隅部に死角ができてしまう



石垣の隅部をへこませたり出っ張らせたりすることで、左右への攻撃が可能になり死角を補える。この側面への攻撃を横矢掛かりという

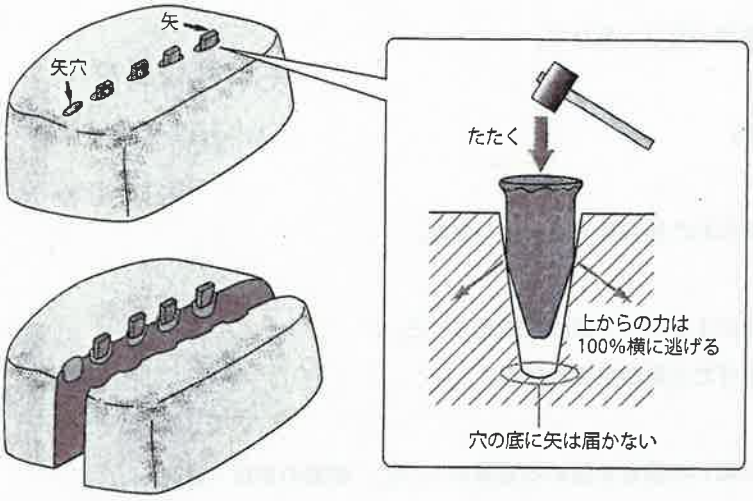


石垣を複雑に折り曲げることで城壁全体にくまなく横矢が掛かり、防御力が上がる

萩原さちこ 2015「図説・戦う城の科学」
SB クリエイティブ株式会社より転載

矢穴（やあな）：石材を割り出す時に矢（鉄クサビ）を入れるためにノミで開けた穴。

矢穴技法の原理

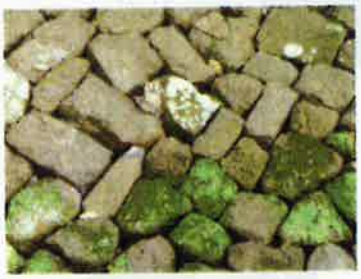


佐藤亜聖 2015「日本中世における砕石技術の展開と東アジアの砕石技術」『第１回中世砕石・加工技術研究会発表資料集』

四重櫓石垣に見られる矢穴

石垣の加工と積み方

石垣は、３種類の加工と２種類の積み方に大別でき、これらを組み合わせた６パターンが基本。



落積

亀甲積

萩原さちこ　『図説・戦う城の科学』ＳＢクリエイティブ株式会社より転載

	乱積	布積
野面積	ほぼ加工していない天然の石をそのまま積む	ほぼ加工していない天然の石を横に目地が通るよう積む
打込接	打ち砕いて表面を平らに整えた石を積み、隙間に小石を詰める	打ち砕いて表面を平らにした石を、横に目地が通るよう積む
切込接	完全に加工した大きさや形の異なる石をパズルのように隙間なく積む	完全に加工した大きさや形の異なる石を横に目地を通しながら隙間なく積む